第11号
2011年
編集・発行 千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の ボランティアがえらんだ 見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

① 人間と　とこがちがうかな？
― チンパンジー ―

当園にはオス１頭（サンタ）、メス２頭（ジージョ、ピータン）が暮らしています。普通、動物の数は１頭２頭と数えますが、１人２人と数えることがあるほど様々なところがヒトにとても近い動物です。テレビでの印象が強いせいか、顔が肌色だと思っている人が多いようですが、オトナの顔は黒、肌色なのはコドモだけです。

当園の屋外展示場はネットが張られています。これは、彼らが投げる土や石を防ぐためですが、そのせいで双方（そうほう）から見えにくくなっています。日によって、夕方、動物科学館の中でガラス越しにチンパンジーが見られることがあります。そのときにぜひ、間近で観察してみてください。彼らもきっと待っています。

② 元祖 イクメン！
― オグロマーモセット ―

尾が黒いので、オグロマーモセット。南アメリカの小さなおサルさんです。見かけが個性的なおサルさんが多い中、飾り毛や耳のふさ毛もなくて地味めだけど、一番サルだとわかりやすいかも。

2008年にペアになってから秋に１頭ずつ出産。マーモセットは年２回双子を産むことが多いけど、このペアも今年の４月６日、初めて双子を出産しました。お父さんは双子をおんぶして大奮闘（だいふんとう）。家族で子育てするのもマーモセットの特徴です。うまくいけば秋頃肩や背中の辺りにしがみついてる赤ちゃんにまた会えるかな。人が多いと落ち着かなくて赤ちゃんを落としてしまうことがあるそうなので、そっと見守ってあげてくださいね。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

③ いやし系 ナンバーワン！
― カピバラ ―

こども動物園の中央付近、大きなケヤキの下に「いやされる」と人気のカピバラがいます。オスの名はゴン、年齢は推定13才、在園10年の古株です。鼻のあたまのところに盛り上りがあり、毛の色が薄（うす）めのこげ茶、体型はずんぐり型です。メスのアズは、昨年９月に埼玉こども動物自然園からやって来た３才のお年ごろ。毛は明るい茶色で目がパッチリした美形（びけい）です。

アズは埼玉では来園者との距離が遠かったようで、千葉では目の前でお客さんと接することにまだ不慣れで、神経質というかシャイな面があるそうです。

アズは繁殖適齢期（はんしょくてきれいき）。少々年の差が有りますがゴンは情熱的にアズにアタックしているそうで、可愛い仔カピバラの誕生が楽しみですね。

④ ニューフェイス＆新居完成
― レッサーパンダ ―

２月に、多摩動物公園からメイメイ（♀２才）が来園しました。シャイな性格のメイメイですが、エサもよく食べ、千葉での生活に慣れてくれました。

２世の誕生が楽しみです。４月には新たに広い放飼場と獣舎がオープンしました。新しい放飼場は、広さを十分にとり、自然木を立体的に配置して、レッサーパンダをいろいろな角度から見えるようになっています。新しい獣舎で公開が始まり、活動中の風太くんたちと目があうかも!?しれませんね。

夏場のレッサーパンダは元気がないように見える場合もあります。野生では中国やネパール等の高山に住み、暑さには弱い動物です。動物公園では熱中症を防ぐため、冷房のお部屋で過ごせるようにしています。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑤遊ぶの大好き！きょうだいみたいな3頭
― ムフロン ―

岩山の間をよく見ると、3頭の子どものムフロン。4月に生まれたメスの結とオスの守、それに5月に生まれたオスの光です。日本の危機をみんなで乗り越えようという想いをこめて命名したそうです。

守は生後間もなく母親から育児放棄されましたが、同じころ死産した別のお母さんに愛情深く育てられました。今は離乳期で、草も食べています。守と光にはそのうちツノが生えてきますから、一目でオスとわかります。活動的になるのは朝と夕方で、ときどき、子どもたちの追いかけっこにおとなも巻き込まれて一緒に走る姿が見られます。

⑥タンポポの綿毛のような美しいかんむり
― ホオジロカンムリヅル ―

草原ゾーンにいる鳥は、ダチョウの他に、シンプルでスラリとした姿の鳥がハゴロモヅル。頭にゴージャスな金色の羽根飾りをつけているのがホオジロカンムリヅル。どれもアフリカに生息しています。ホオジロカンムリヅルは外見で性別を見分けることはできず、当園の3羽もオスかメスかわかりません。

身長は約1m、翼を広げると端から端まで2m近くあり、体重は3.5kg位。風切羽根を切ってあるので飛べませんが、天敵のいない動物公園で、ハゴロモヅルと仲良く草原の虫などつついている姿が優雅です。よく似ている鳥「カンムリヅル」は、ほほに赤い部分があり、世界で15種いるツルの仲間のうち、この2種だけが樹上にとまることができます。

⑦英語の名は「尾の白い 海のワシ」
― オジロワシ ―

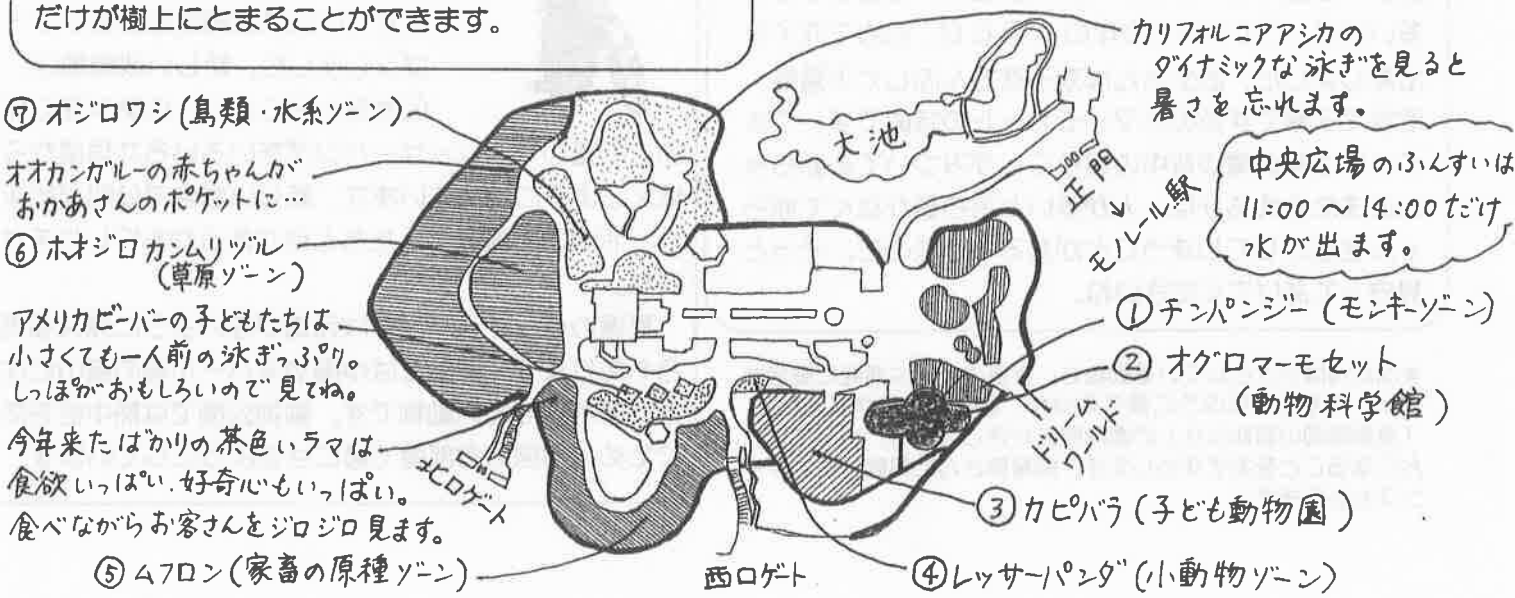
日本には、シベリアなどから渡ってくるオジロワシと、北海道東部に通年棲むオジロワシがいます。冬の知床・羅臼では、海、湖、川の近くの木や流氷の上にとまっているのが見られます。獲物を見つけ急降下、水面に近いサケなどの魚を鋭い爪で捕らえたり、空中でカモメなどの水鳥を捕らえて食べます。翼を広げると2m近くもあり、尾羽が白いことからこの名前がつきました。国の天然記念物として保護されています。

木や岩の上で背筋をスクッと伸ばしてとまっているオジロワシは、大変りりしく美しい姿です。当園でも高い所からいつも皆さんを見守っています。ぜひ見に来てくださいね。運がよければ翼を広げて飛び回る姿も見られます。

動物の赤ちゃんたち

今年の春は、ムフロン、オグロマーモセットのほかにも、下のような動物たちに赤ちゃんが生まれました。見て行ってくださいね。

シロオリックス（草原ゾーン）
ワオキツネザル（モンキーゾーン）
クロミミマーモセット（動物科学館）
アメリカビーバー（小動物ゾーン）
ミナミコアリクイ（動物科学館）



第12号　2012年
編集・発行 千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

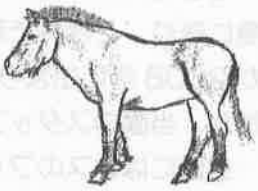
ボランティアがえらんだ

セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

① 野生動物の底力
― モウコノウマ ―

子ども動物園には数種類の家畜のウマがいますが、家畜原種ゾーンのモウコノウマは、家畜ではなく野生のウマ。むかし、世界には何種類もの野生馬がいましたが、ほかは絶滅し、モウコノウマだけが生き残りました。

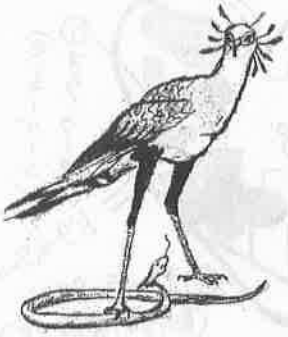


このモウコノウマも、20世紀に自然の環境では絶滅してしまいましたが、ヨーロッパの動物園で飼われていたものを繁殖し、今では世界で2千頭以上になりました。日本にいるのは当園の2頭のほかに、多摩動物公園の5頭だけ。当園は日本で初めて繁殖に成功し、トメキチもクリスの母も当園生まれです。

家畜のようには人になつかず、爪などの手入れや調教はとてもむずかしいそうです。冬には毛が伸びてフカフカになり、夏には短毛のさっぱりした姿に。たとえ人に飼われていても、自立して生きる矜持を感じさせます。

② 飛べるけど飛ばない草原の狩人
― ヘビクイワシ ―

ヘビクイワシはアフリカの草原地帯に生きる鳥です。求愛の季節には大空高く舞いあがり、優れた飛ぶ能力を見せますが、普段はめったに飛ばない鳥で、地上を一日中（10～20km）大股で歩き回り獲物をあさります。レオタード姿で長い脚を繰り出し、優雅に歩くバレリーナのようですが、実際は草原の狩人。歩き回って昆虫類やネズミなどの小型哺乳類、ヘビ、トカゲなどを草むらから追い出し捕らえます。毒ヘビ相手でも長い脚を巧みに使い、必殺キックの連続技で弱らせ、鋭いクチバシで止めを刺します。



当園では　'97年に日本初の繁殖に成功、無事成鳥に育て上げることができました。スタイル抜群の優雅な姿を、ぜひ見においで下さい。

③知ってる？ 竜王のヒミツ
― アミメキリン ―

僕はアミメキリンの竜王です。当園産まれのサツキのお婿さんとして京都市動物園から来ました。仲間のキリンはアフリカの草原地帯に棲み、現存する動物の中では一番背が高く、4～5.5mぐらいになります。僕はまだ4歳だから、これからもっと大きくなるよ！

ここではおもにヤマモモ・ネズミモチ・シラカシなどの葉や乾草を食べています。40cmくらいの長い舌を器用に使い、枝から葉を引き抜いて噛み砕き、4つに分かれた胃に運び、また口に戻してすりつぶす「反芻」を繰り返しながら消化します。

ところで皆さん、僕の秘密をご存じですか？　右後ろ足の模様をよく見るとひまわりマークが浮かび上がってきます。また、右後ろ足の内側、かかとのちょっと上にハートマークも。探してみてね。

今年は辰年で竜王の当たり年だってみんなが言っています。なにかラッキーなことがあるといいな！

④「幸福の国」ブータンの 幸福の鳥（？）
― ヒオドシジュケイ ―

ヒオドシジュケイは、インド北部からネパール、ブータンにかけて標高2,500m～4,000mのヒマラヤ山脈沿いに棲んでいます。動物公園では、2組のつがいを飼育しており、エサは、小松菜・配合飼料・米・小麦・ミルワームなどを与えています。

オスは、燃え上がるような赤い体に黒く縁取られた白い斑点が多数あり、幻想的な美しさです。2月～8月の繁殖期に顔のほおやあごの辺りにある肉垂を前掛け状にとても大きく広げてメスにアピールします。この求愛行動は、1分ほどで終わってしまうので、なかなか見ることができませんが、見られたらとてもラッキー！ メスは茶色で地味ですが、落ち着いた色調で上品な貴婦人のようです。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

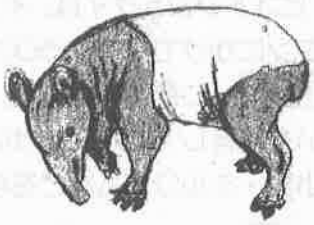
⑤文句なしのネーミング！
― エンペラータマリン ―

動物科学館の２階は、中南米に生息する昼行性小型サルのエリアです。暗くないから怖くないし、カメラもＯＫ！ 動物の名前を覚えたければ、まずここに来てください。シロガオ・ワタボウシ・ピグミー・クロミミ・オグロ。すぐにイメージできますね。中でも「なるほど！」といえるのは、エンペラータマリン。左右に長く伸びた純白のクチヒゲは、皇帝の威厳を漂わせます。

このエリアのもうひとつの見どころは、赤ちゃんの育児。おんぶしたり、毛づくろいする主役は、父親です。時には、兄・姉もお手伝いします。小さな赤ちゃんは、背中の毛にもぐりこみながら、しがみついています。どの種類も赤ちゃんの細いシッポを探し出すのが、発見の近道です。

⑥絶滅から救いたい 水辺の住人
― マレーバク ―

イノシシのような体型にくっきり白黒のツートンカラー、上唇と一体化した鼻は長く伸び器用に動きます。そんな個性的なマレーバクは、東南アジアの森林や水辺のやぶ地に棲み、近年の生息地の分断や減少、乱獲により絶滅が心配されている動物です。国内の動物園には、現在35頭ほどしかいません。ユキミはメスの中では最高齢の21歳。当園でこれまでに６頭の子を出産し、今はゆったり老後を楽しんでいます。ユメタもユキミの子で５歳、小柄でちょっと臆病なオス。サコ（４歳）はユメタのお嫁さんとして多摩動物公園からきました。当園では、そんな２頭の赤ちゃん誕生を期待しています。親とは全くちがう模様のマレーバクの赤ちゃん。生まれたら見に来て下さいね。



★園内には約３６０本のソメイヨシノがありますが、そのほかにも四季折々に花や紅葉が楽しめます。お友だちと誘い合わせてゆっくりおいでください。

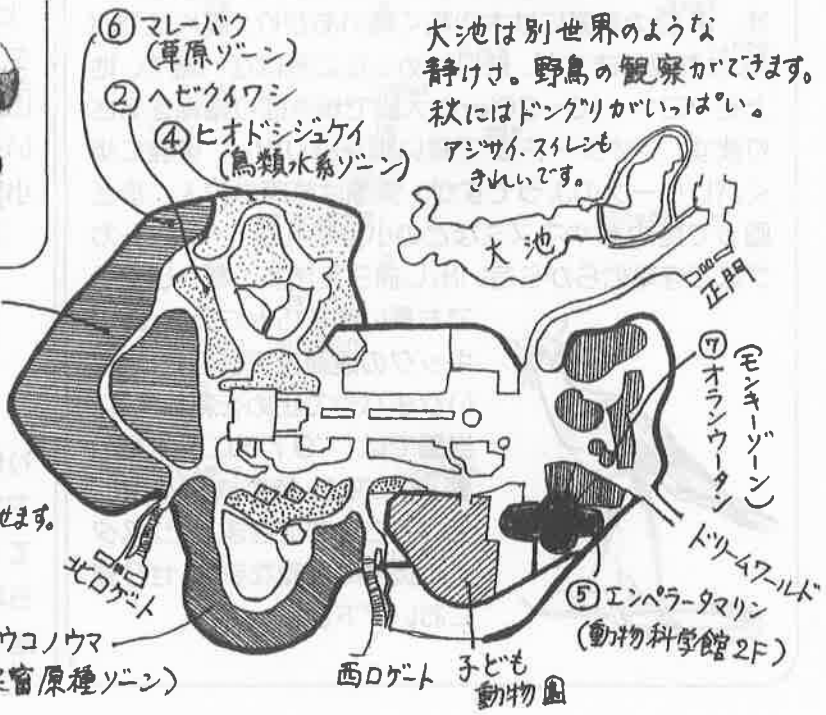
⑦森がなければ生きていけない
― オランウータン ―

現地の言葉で「森の人」と呼ばれるオランウータンは、東南アジアのボルネオ島とスマトラ島だけに棲む大型類人猿です。近年、生息地の森が切り開かれ、パーム油の原料となるアブラヤシの大規模な農場が作られているために、住みかを奪われて急激に数を減らしています。木の上で単独に生活するオランウータンは、地面を歩いて移動するのが苦手。森が分断されてしまうとパートナーに出会えず、繁殖できないのです。

そこでＮＰＯにより、日本の消防ホースをボルネオ島に送り、とぎれた森を吊り橋でつなぐプロジェクトが2008年に始まりました。各地の動物園がこれに参加し、当園のスタッフも協力しています。

当園にはオスのフトシ（25歳）とメスのナナ（21歳）がいます。指が長く、まるで手のように見える足をご覧ください。木の枝をしっかり握れる足。歩くのには不向きだとわかります。オランウータンが自然の中で暮らしていける環境を守りたいですね。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。



動物科学館1Fの夜行性動物のフロアは昼夜が逆転しています。午後4時ごろに「夜明け」になるのでお早めに見て下さい。コウモリの食事風景はちょっとビックリです。

モウコノウマ前の小ぶりな木はオオカンザクラ。ソメイヨシノより一足早く、少し濃い色の花を咲かせます。

トナカイそばのギョイコウ（御衣黄）は緑色の花を咲かせるサクラ。珍しいのでわざわざ見に来られる方も。4月中旬が見頃です。

第13号 2012.7.
編集・発行 千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

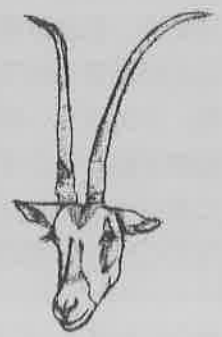
ボランティアがえらんだ

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

①白い体と 美しいツノ
― シロオリックス ―

昨年に続き今年も、シロオリックスのカップルに男の子が生まれました。３月８日生まれのミツキです。ツノもぐんぐん伸びておとなっぽくなりましたが、まだお母さんのラザニアに寄り添って歩いたり、時折お乳を飲んだりしています。

シロオリックスは、オス、メスともに体重 200 キロほどもある大きな白い体に、長いツノのあるウシ科の動物。首回りと顔に黄土色のもようがあり、目のまわりの斑が道化師のようで愛嬌があります。本来の生息地はアフリカの砂漠や乾燥地帯で、あまり水を飲まなくても生きていける、強靭な体の持ち主ですが、乱獲などのために野生では絶滅してしまいました。動物園で守り、増やしていきたい、希少な動物です。



②敵はこないか？ 背筋を伸ばして見張り役
― ミーアキャット ―

ミーアキャットはアフリカ南部の乾燥地帯で、草原に掘った巣穴や、岩の割れ目につくった巣に家族で暮らします。昆虫やクモ・サソリ等のほか、植物も食べます。朝の日課は日光浴。後ろ足と尾を地につけて立ち上がり、体を温めます。かならずだれかが上空や周囲を見張り、危険な時はするどい鳴き声で知らせ、みんなアッという間に巣穴に逃げ込みます。

当園では３頭が仲良く暮らし、エサは鶏頭・ミルワーム（幼虫）・煮イモ・バナナなど。穴掘りの名人で、展示場の土の下には無数の通路と部屋があり、寝るのも赤ちゃんを産むのも地下の部屋です。地上に置かれた体重計の上によく見張りが立ちます。背筋をピッと張って周囲を見張る、りりしい立ち姿をごらんください。

③赤ちゃんが生まれました
― ワオキツネザル ―

白と黒の輪が連なった長いシッポが特徴のワオキツネザル。輪の数はほぼ１４～１５本、群れで移動するときはピンとたてたシッポが目印になります。両親と今年５月生まれの赤ちゃんと兄姉で、合計６頭のファミリーです。寒さに弱いので、朝はお日さまに向かってみんなで手足をひろげて身体を温めるのが日課。水に囲まれた島でみんなで寄りそって休んだり、走り回ったり。となりのフクロテナガザルが大きな声で鳴き出すと対抗してか、ネコに似た「ミャー」という鳴き声をあげますが、いかんせん声量ではとてもかないません。フクロテナガザルの大きな声が聞こえたら、ワオの声も聞こえてくるか耳をすましてみてください。赤ちゃんの姿も探してみてね。

④怒らせると くさ～い胃液を吐きかける
― ラマ ―

ラマは、南米のアンデス地方に多く生息する偶蹄目ラクダ科の動物です。祖先はラクダと共通ですが、住む場所によって、砂漠地帯では脂肪のコブを持つラクダ、高地ではラマやアルパカなどに進化したといわれています。

ラマは、高地に住んでいるため、心臓が大きく、血中のヘモグロビンが豊富で高山病になりにくい体質です。性格はおとなしく、人に慣れやすいですが、怒ったときは要注意。飼育係さんによると、以下の順番で怒りを表すそうです。耳をうしろに倒し半口をあけて威嚇する→声を発する→胃液を吐きつける→蹴る・噛みつく。胃液はとても臭く、体を洗っても匂いはなかなか取れないそうです。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑤そのオシャレな姿は　なんのため？
― ミナミコアリクイ ―

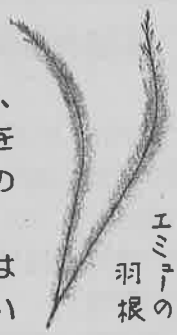
黒い吊りズボンをはいた白クマのぬいぐるみのようなその姿に、思わず「なんでそんなに可愛いかっこうをしているの？」とききたくなります。夜行性動物というと暗闇でうごめく、ちょっとブキミなイメージですが、ミナミコアリクイはスマートでおしゃれ。白く見える毛はうすい金色がかっています。前足の黒くて長い爪は、アリの巣をこわすためのもの。細長い口に歯はなく、舌を伸ばしてアリやシロアリを食べます。

長いしっぽでバランスをとりながら枝の上を歩きます。ほとんど鳴きません。

南アメリカ北部と東部に生息しています。当園では、ヨーグルト、缶詰のドッグフード、はちみつ、バナナなどをミキサーにかけたものを与えています。

⑥世界で２番目に大きい鳥
― エミュー ―

オオカンガルーの隣にいるのは、オーストラリアの国鳥、エミューです。当園にはオス・メスのカップルと、2010 年に生まれたメスがいます。食欲旺盛で、エサ入れに頭を突っ込んでいることが多く、ちゃんと顔が見えたらラッキー。エサは白菜、キャベツ、パン、固形飼料です。

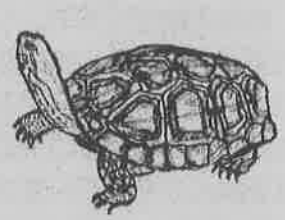


最大の鳥、アフリカのダチョウと同じ、飛べない鳥ですが、ダチョウはつばさを広げることがあるのに対し、エミューのつばさは小さくて外からは見えません。足の指は、ダチョウは２本、エミューは３本。２枚の羽根の根元がつながっているのもめずらしい特徴です。

メスが産んだ卵をオスが温めてかえし、ヒナの世話もする、けなげな父親ぶりもユニークな習性。ケンカの得意技はとびげりです。

⑦「ボクって　輪流？」
― クサガメ ―

クサガメは、北海道から沖縄までの里山や水辺に生息していますが、江戸時代中期以前にはクサガメに関するたしかな記録がないことなどから、18 世紀末頃に朝鮮半島もしくは中国大陸から移入されたと考えられています。一方、ニホンイシガメ（幼体はいわゆるゼニガメ）は日本の固有種で、古くからある亀甲模様のデザインは、ニホンイシガメの甲羅模様です。



クサガメは、１月から５月頃まで泥の中で冬眠します。肛門（くわしくは、総排泄腔）の毛細血管でのガス交換、および皮膚呼吸により水中の酸素を取り込むことができるので、冬眠中はずっと泥の中にいても平気。カメはもっぱら「鈍い」というイメージですが、危険を感じるとすばやい動きを見せます。当園では、ニホンイシガメと同じ池で飼育していますので、くらべてごらんください。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★動物科学館１階の夜行性動物のフロアは昼と夜が反対になっていて、動物たちの夜の行動が見られます。暗くてちょっと『おばけやしき』みたいだけど、なるべく大声を出さないでくださいね。
午後４時ごろには『夜明け』になるのでお早めに見てください。

第14号

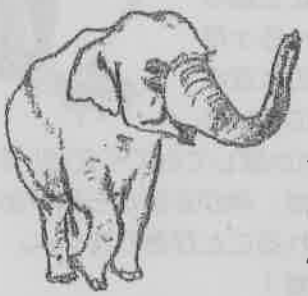
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の ボランティアがえらんだ 見どころ7+

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

①おしとやかな歩き方のヒミツは…
― アジアゾウ ―

アジアゾウのアイちゃんは、展示場の奥で「フン、フン、フン…」と歌いながらステップを踏んでいるように見えることが多いですね。でも、トレーニングのときなどに飼育係さんの姿が見えると、大急ぎで走りよって行きます。

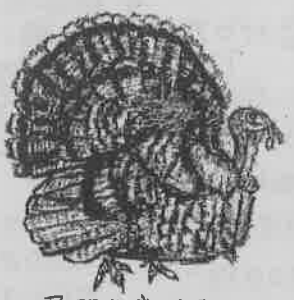


大きな重い体を運ぶのですから、歩き方も「ドシン、ドシン」かと思いきや、なんだか優雅に「ヒタ、ヒタ、ヒタ」と歩いているみたい。その秘密は、ゾウの足の構造にあります。かかとのところに、衝撃をやわらげるための脂肪のクッションが厚く入っているんですよ。動物科学館に、ゾウの骨格標本がありますから、足を見てください。意外に長い指でつま先立ちをしているのがわかります。草原を長く歩くのに適した体ですね。

②つい顔に出やすいタイプです
― シチメンチョウ ―

以前はアメリカバイソンと一緒に展示されていたシチメンチョウが、向かい側の小屋に移されたので、間近でよく見ることができるようになりました。この鳥の面白さはなんと言っても、その名の通りの顔の七変化。頭から首にかけて羽の生えていない皮膚が、青、紫、赤と色を変えます。その上、くちばしの上から垂れ下がっている肉垂が、太く短くなって立ち上がり、まるでツノのようになることも。かならずしも怒ると変化するわけでもないらしく、普通にしていてもひんぱんに変わりますから、静かにゆっくり観察してくださいね。

オスはクジャクのように尾羽を広げることもあります。鳴き声はニワトリより低く、咳のようです。



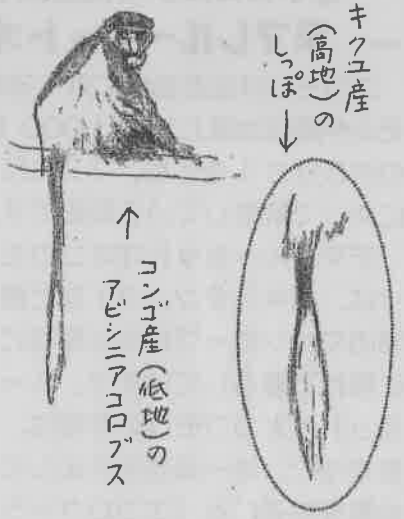
尾羽を広げてディスプレイするオス

③黒と白の長い毛がゴージャス
― アビシニアコロブス ―

アフリカ中部・東部の森に棲むアビシニアコロブスは、木の上で暮らし、木の葉を主食に、果実や花芽も食べます。サルには珍しく複数の胃を持ち、牛と同じように、胃の中でバクテリアにより木の葉を発酵させ、栄養分を吸収しています。

別名クロシロコロブスと言われるように、つややかな黒と白の毛のコントラストが絶妙。

当園では、低地熱帯雨林に棲むコンゴ産と、高地に棲むキクユ産を並べて比較展示しています。同種ですから似ていますが、よく見ると、気温の低い高地に棲むキクユ産は、コンゴ産にくらべて毛が長く量もゆたかです。しっぽを見ると、キクユ産は半分以上が白毛でこんもり、一方コンゴ産は先端が白毛でほっそりスマートです。ぜひくらべて見て下さい。



④のどのヒラヒラにさわってみたい
― ハクギュウ ―

南房総市の「千葉県酪農のさと」から迎えた2頭の白い牛。「なんだ、これは？　ウシだ！」と、お客様の歓声があがっています。細長い顔に大きな耳。背中のコブと、あごから胸まで垂れ下がった皮膚。エキゾチックな雰囲気を漂わせていて、「インドの牛？」と思われがちですが、アメリカ原産の「ゼブー種」です。都合により家畜の原種ゾーンに展示されていますが、野生動物ではなく、家畜です。乳牛としては、白と黒のホルスタインが普及したため、現在では数が少なくなっています。

⑤よく見ると　ぽっちゃり系
― オグロプレーリードッグ ―

北米の草原地帯（プレーリー）に穴を掘って巣を作り、群れで暮らすリスの仲間。オス１匹に対しメス数匹という一夫多妻の家族で暮らし、大きな群れはプレーリータウンと呼ばれます。天敵のコヨーテやタカなどが近づくと「キャンキャン」という犬のような鳴き声を出すことから、この名前がつきました。

巣穴は地中深く複雑になっており、部屋には草がしきつめられていて、おとなになると自分の部屋を持つようになります。巣穴の入り口は雨水が入ってこないように盛り上っており、周辺には穴を掘った土で見張り台を作り、歩哨（ほしょう）のように見張りをする習性があります。当園でも見張りをするかわいい姿がご覧になれます。

⑥ネズミによく似た顔を　近くで見てね
― デマレルーセットオオコウモリ ―

コウモリは空を自由に飛べる唯一のホニュウ類で、その仲間は地球上で約 1,000 種類。ホニュウ類全体の約5分の１を占め、ネズミ目（もく）に次いで繁栄している動物です。

デマレルーセットオオコウモリは、パキスタン、タイなど熱帯のマングローブ林や洞窟などに群れで暮らしています。ルーセットオオコウモリの仲間は、夜行性で、唯一超音波を出して位置を知ること（エコロケーション）ができるオオコウモリ。野生ではおもに果実を食べており、当園では、りんご、バナナ、オレンジ、トマト、煮たサツマイモなどを与えています。体重 80ｇに対して一日 60ｇ位のエサを食べる大食漢（たいしょくかん）。夜行性動物ゾーンでは昼夜が逆転しているので、昼過ぎごろに食べる姿を近くでご覧になれます。

★動物科学館１階の夜行性動物のフロアは昼と夜が反対になっていて、動物たちの夜の行動が見られます。暗くてちょっと『おばけやしき』みたいだけど、なるべく大声を出さないでくださいね。
午後４時ごろには『夜明け』になるのでお早めに見てください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦胸のラインは　おとなの印
― フンボルトペンギン ―

ペンギンというと、寒いところの動物と思われがちですが、フンボルトペンギンは南米の太平洋沿岸にいる、暑さにつよいペンギンです。野生では絶滅が心配されていますが、日本では、気候が合っているのと、卵をかえす技術や、病気の治療法が確立されているので繁殖は順調で、ペンギンの中ではこの種が一番多く飼育されています。

通常、年に２回、春と秋に２個の卵を産み、孵化（ふか）してから２～３ヶ月は親がエサを運びます。体の大きさが同じでも胸の黒いラインのないのが子どもです。どれが子どもか探してみてくださいね。

子ども動物園のプールでは、体が水面から飛び出す「イルカ飛び」を見せてくれることがありますよ。
チャンスはエサやりの時間！

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

第15号　自牛
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の ボランティアがえらんだ 見どころ7+

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

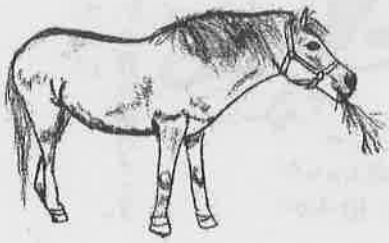
①3頭の見分けかた おしえます
― ニシゴリラ ―

見た目が黒く大きいからか「強い・怖い」といった印象を持たれるゴリラですが、じつは草食系のおだやかな動物です。野生では群れで一日中移動しながら草・葉・樹皮などを食べます。ヒトに近い動物なので、よく来園者の方が「あのゴリラ、だれそれにそっくり」などと楽しそうに話されるのを耳にします。

さて当園の３頭の見分け方は…　まずモンタは顔の手入れがクセなのか、つるりとした顔をしています。ケンタは頭がとても大きくもり上がっています。メスのローラはオスの２頭に比べて体つきがとてもきゃしゃです。ゴリラのオスは体の大きさがメスの倍近くになり、群れのメスや子どもを守ります。モンタ・ケンタ・ローラを見分けてお気に入りを見つけてください。

②力の強い働き者
― 家畜のウマ３種 ―

子ども動物園にはペルシュロン種、道産馬、シェットランドポニーの３頭の馬がいます。一番大きいのは、フランス原産のペルシュロン種で女の子です。この種は、体形はサラブレッドにくらべ、脚が短く胴が長いのが特徴です。オスの大きなものでは体高（肩の高さ）が 1.7m、体重は１トンを超えるもののいますが、性格はとてもおとなしくて従順。体が大きく力が強いため、馬車や荷物などを引くのに使われます。一方、３頭で一番小さいシェットランドポニーは、かつてイギリスの炭鉱で石炭を運んでいました。狭い坑道で石炭を運ぶのに適した小さな体で力持ち。３頭の中では一番気性が荒いそうです。



③自慢の真っ白いぼうしを見にきてね
― ワタボウシパンシェ ―
（別名ワタボウシタマリン）

動物科学館２階は、中南米に生息する小型サルのマーモセット・タマリンたちのエリアです。なかでもワタボウシパンシェはコーナーの一番広い場所で、家族仲良く愛嬌のある動きで枝から枝へ素早く跳び回り、皆さんの目を楽しませています。インディアンの頭飾りのように美しい白い毛の房から、この名前がつけられました。

コロンビア北西部の熱帯雨林に棲んでいますが、現在は絶滅危惧種の希少動物。頭からお尻までが 23 ㎝前後で、それよりも長いしっぽを持ち、十数頭の家族単位で暮らします。多くの場合双子を出産、オスや先に生まれた子も育児に参加します。野生では果実・樹液・昆虫などを食べ、当園では果物・ふかした野菜・ミルクパン・昆虫などを与えています。小鳥のように高い声と、人には聞きにくい周波数を用い、たがいにコミュニケーションしています。

④高い大将って、だれのこと？
― アオダイショウ ―

子ども動物園の中にある飼育センターには、カヤネズミ、アカハライモリなど、身近な生き物が展示されています。アオダイショウは、千葉市内にも多く生息するヘビですが、近くでじっくり観察したことのある人は少ないかもしれませんね。

その名前から想像するほど青くはなく、ロウのような質感の肌に、ガラス玉のような目がキラキラしています。ヤマカガシなどの他のヘビより大きいのが「大将」と呼ばれるゆえんでしょうが、顔つきはどちらかというと謙虚な印象。他のヘビのイラストが解説板にあるので、くらべて見てください。すべるようになめらかな動きも優雅です。

⑤がんばれライム君
― グレビーシマウマ ―

サバンナシマウマやヤマシマウマとちがい、グレビーシマウマは大型で縞模様が細かく、脚の縞がひづめの上まであるのが特徴です。ピンとたったタテガミ、つぶらな瞳、丸くて大きな耳、ふっくらとしたお腹とおしりの曲線。いつ見ても、見とれるほどの美しさです。

かつては、アフリカ東部の乾燥した草原の広い範囲に生息していましたが、水資源の枯渇と乱獲のせいで、絶滅寸前まで追い込まれてしまいました。現在、野生では2000頭程度しかいないと言われています。当園の３頭のうち、メスのシズカは日本最高齢のおばあちゃん。オスのライムはカエデのおむこさんとして多摩動物公園から来ました。今年で４歳になるのでそろそろ２世誕生が期待できそうです。

⑥風になびく　天女の羽衣
― ハゴロモヅル ―

草原ゾーンにはシタツンガ、ダチョウと同じエリアに２種のツルがいます。頭に羽根飾りのあるのはホオジロカンムリヅル、シンプルでスラリとしたのはハゴロモヅル。どちらもアフリカの草原地帯に生息する鳥です。

ハゴロモヅルは風切羽根の一部が長く伸びて、天女の羽衣のようなのでその名がつきました。くもり空のような水色で、草原の丘に立ち、風に吹かれて長い羽根をなびかせている姿は神々しいような美しさ。本来は飛びますが、当園では羽根の一部を切ってあるので飛べません。野生では草の実や、昆虫、カエル、魚、小さな哺乳類などを食べる雑食で、当園でもホオジロカンムリヅルとなかよく並んで草の間から昆虫などをさがし出している姿が見られます。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。場所・時間・内容は当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

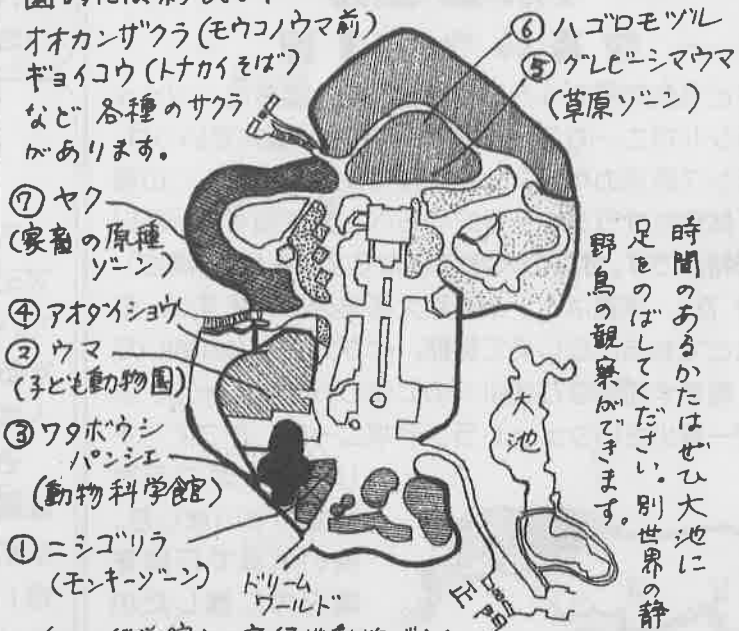
⑦シッポとツノがチャームポイント
― ヤ　ク ―

野生のヤクはチベット高原の標高の高い地域にわずかに生息しており、体重が800ｋｇにもなる大型の動物ですが、当園にいるのは家畜種のメスで、体重は350～400ｋｇ程度。家畜のヤクは極寒の高地に適応する厚い毛皮をもち、山道で荷物を運ぶのに使われるほか、乳は重要な栄養源に、フンは乾燥させて燃料にと有効に利用されています。

顔も体もウシですが、しっぽだけはウマのように根元から毛のふさになっており、地面に届くほどの長さで毛の量も豊富です。白いツノが、天を指さすように美しいカーブを描いて上に伸びています。家畜種ですから珍しい動物ではありませんが、国内でヤクを見られるところは大変少ないので、お見逃しなく。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

園内には約360本のソメイヨシノのほかオオカンザクラ（モウコノウマ前）ギョイコウ（トナカイそば）など各種のサクラがあります。



動物科学館1F 夜行性動物ゾーンのミナミコアリクイは昨年11月に赤ちゃんが生まれました。時間帯によって母子が見られます。